

## ユダヤ人とローマ人

### 一

ヨセフスは、その著『ユダヤ戦記』の「序文」において、ユダヤとローマとの間で戦われた「第一次ユダヤ戦争」(紀元後六六年―七〇年)の「戦争責任」を、専ら「ユダヤ人叛徒」に帰して、次のように記している。「祖国を滅ぼした原因は内乱(*stasis interna*)にあったこと、(決戦に)乗り気でなかったローマ軍と火とを聖なる神殿に引き寄せたのは(他ならぬ)ユダヤ人の僭主たち(*oligarchoi*)であったこと、これらのことについては……ティトウス帝が自身が証人である。……これらの(ユダヤ民族のなめた)不幸の責任は決して外国人にあるのではない」(I 10―12)。「ユダヤ戦記」(以下『戦』と略

### 土 岐 健 治

記)の冒頭部分におけるこの記述に基づいて、従来次のように考えられて来た。「ヨセフスはまず第一に(一)エルサレムの滅亡がローマの責任ではないことをユダヤ世界に伝え、さらに(二)この災厄の責任がユダヤ民族全体ではなく、一部の過激派に負わさるべきであることをローマ世界に宣言しているのである」<sup>(1)</sup>。その際、開戦前夜のパレスチナについて報告している『戦』第二巻において、ヨセフスが、一部のローマ人統治者たちも、開戦に至る経緯の少なくとも一部について、責任を負わねばならないことを訴えていることは、ヨセフスの読者の容易に看取しうるとおりである。最近の有力なヨセフス研究者は、この点にふれつつ、確かにヨセフスは開戦の責任が「ユダヤ人叛徒」と「パレスチナのローマ人総督

の一部」の両者にあることを認めているが、後者よりも前者の責任をはるかに大きなものとして描いている、と指摘する<sup>(2)</sup>。なるほど、ヨセフスがローマ軍に投降した後の、『戦』第三巻第九章あたり以降、特にエルサレム攻防戦を描いた、第四巻以降においては、ウェスバシアヌスとティトゥスに率いられた「よい」ローマ人と、「叛徒」「盗賊」「僭主」等々と呼ばれる「悪い」ユダヤ人との戦いという構成が貫かれており、この部分に関しては、右に挙げたヨセフスの「序文」の言葉と、それに基づく従来の研究者たちの説は、『戦』の本文の記述に即応していると言ってよいであろう。従って、その部分の記述に重点を置けば、ヨセフスは「ユダヤ人叛徒」の責任を「一部ローマ人総督」のそれよりも重く見ていると言い得るであろう。しかしながら、開戦に至る経緯を記した部分においては、いささか事情が異なっているように思われるのである。そして、「戦争責任」を云々する場合、開戦後の、戦闘行為を含む、混乱の中での言動もさることながら、むしろ、開戦に至るまでの、開戦を不可避なものとした、緊張激化に対する「責任」の方が、重視されるのではないであろうか。少なくとも『ユダヤ戦記』

を記しつつあったヨセフスは、そのように考えたように思われる。それはともかくとして、Cohen等に代表される見方は、開戦前と開戦後とを混同したものと云ってよいであろう。そして、そのような「混同」が、ヨセフスの真の意図を覆い隠しているように思われるのである。筆者は、以上のような観点から、本稿において、『戦』第二巻の開戦前の記述に焦点を合わせ、右に記したような従来の「常識」を『戦』の本文の語るところに照らして検討し、そのことを通して、ヨセフスの著述の意図とその文学的手法について理解を深めたいと思う。

## 二

ヨセフスは、ヘロデス大王歿後の混乱のアルケラオスによる処理の報告をもって、『戦』第二巻を開始する。5—13節のエピソードにおいては、「革命的分子」(οἱ νεωτεριστῆς) (5節)、『di νεωτεριστῶν (8節)』乃至「蜂起」(στράξις)の首謀者たち(11節)と呼ばれている人々は、——これらの呼称は後に「悪いユダヤ人」を示す明確な指標の一つとして用いられているにもかかわらず——単純に否定的には描かれておらず、む

しろ、英雄的に描かれている面すらある。彼らは、「父祖伝来の律法と神殿のために」ヘロデス大王によって処刑された「賢者たち」の死を悼んで集まったのであり、ヘロデス大王の傀儡大祭司を罷免して「もっと敬虔で清潔な人物」を大祭司に任命するよう要求し、アルケラオスのさしむけた「一步兵大隊」との小競り合いののち、「まるでそのような恐ろしいことなど何もなかったかのごとくに、犠牲式へ向かう（信仰の証）。ところが、アルケラオスは、そのようにして「犠牲を捧げていた者たち」に「全軍」をさしむけて、「約三千人」を殺戮したのである。（ヨセフスにアルケラオスを弁護しようという意図があったならば、この数字は挙げられなかったか、もっと小さくされたであろう。ヨセフスにおいては、数字はヨセフスの意図を雄弁に語っている場合が多い）。このような処置が、たとえやむを得ない処置であったとしても、情勢の不穩化を助長したであろうことは、読者の容易に想像し得るところであり、このエピソードにおいてヨセフスが誰をとがめようとしているかは明瞭である。アウグストゥスの主宰する「元首顧問会」の場面（二章、六章）においては、このアルケラオスの処置の

不適切さ、「残虐さ」が、繰り返し訴えられ、彼に虐殺された人々が弁護されているのである。そして、「もしも、自ら（王たるに）ふさわしいことを示すならば、将来王位につける」との約束の下に、アウグストゥスによって暫定的に「エトナルケウス」に任命されたアルケラオスは、すぐ次の章において、早速、「苛酷」な統治をとがめられて、ガッリアへ追放されるのである。

アルケラオスに続いて、「革命的な精神（*seweporotia*）にはずみを与えた」（41節）とヨセフスから非難されるのは、「シリアの財務官」サビヌスである。（二、三、五章）。彼は、シリア総督ウアルスの目を盗み、アルケラオスの留守を狙ってエルサレムへ侵入し、「食欲」に動かされて、国庫や神殿財産を略奪する。このようなサビヌスの行動に対して、ユダヤ人が「憤り」、結果して、サビヌスに立ち向かったとしても、とがめられるべきではない。否、むしろ、ローマとその傀儡王国の財産を守ろうとした、として、賞賛されてもおかしくないであろう（ヨセフスはそのように明記してはいないが）。事実、ヨセフスの伝える、ローマ軍に対する彼らの態度は、紳士的ですからある。サビヌスには、ユダヤ人の騒動を抑え

る力(勇氣)はなく、エルサレムで窮地に陥って立ち往生していたところを、ウォルスのおかげでようやく救出され、こそこそと逃げ出すのである。

このような、統治者たちの「失政」「悪政」をうけて、四章に至って、ようやく「王位をうかがう」ユダヤ人たちの活発な動きが紹介されるが、四つのグループの活動がわずか十一節(55—65節)に纏められており、記述もアルケラオスやサビヌスの場合に比べて極めて図式的である。117節の「ガリラヤのユダ」への言及も、わずか一節のみであり、その活動の具体的な内容は一言も触れられない。ユダヤ人叛徒の活動を紹介する際のこのようなそっけなさは、アルケラオスやサビヌスの活動を報告する際の詳細さ微細さと比較して、意図的なものであるように思われる。

次いで、ユダヤ州第五代総督ピラトゥスの「悪政」が、九節(169—177節)にわたって描かれる。彼は、卑劣な仕方ユダヤ民族の「律法を踏みじり」、続いて神殿財産を勝手に用いることによって、ユダヤ人の民族感情を逆なでし、当然にもこれに異を唱えて結集したユダヤ人多数を、撲殺する。ピラトゥスは、神殿財産を自らの管

轄下にあるものと考えていた可能性もあり、かつ、持ち出したお金は水道敷設用に使われたのであるから、ヨセフスは、その気にさえなければいくらでもピラトゥスを弁護できたはずなのに、むしろ、「聖なる宝物庫の金を消費し」て「さらに別の騒動を引き起こした」と、言葉鋭く非難するのである。

181—183節では、ヘロデス・アンティパス(ガリラヤのテトラルケース)の失脚が、短く取り上げられる。彼は、甥(腹違いの兄弟の子供)でありかつ義兄弟でもあるアグリッパ一世の目覚ましい昇進を「妬み」、「欲深」の罰を受けて、ヒスバニアへ追放され、その地で客死する。

この短い挿話によって、ヨセフスは、ローマの傀儡の統治者がその任に耐え得る人物ではなかったことを、読者に印象付ける。この挿話は「ガリラヤの不穏な情勢」と無関係ではあり得ないであろう。

### 三

第十章(184節)に至って、皇帝ガイウス・カリグラが、槍玉に上げられる。彼は、「運命に対して極めて傲慢な態度を取り」(*ἐπιβρονεὶ εἰς τὴν τύχην*)、「その不信仰

な行ないをユダヤにまで広げ」るのである。エルサレム神殿の中に彼の像を建立せよとの帝の命令は、当然のごとくユダヤ人の激しい抵抗に会い、パレスチナ情勢の不穏化に一層の拍車がかけられる。しかし、ヨセフスによれば、このようなガイウス・カリグラの不敬虔な行為を、神は決して見過ごしにはせず(186節)、ローマとユダヤの衝突の危機は、ガイウス・カリグラの突然の死によつて、奇跡的に回避される(註(10)参照)。この挿話の中でも、皇帝の命令に命懸けで抵抗するユダヤ人の信仰深さが、繰り返し強調され、天を蔑する皇帝の不敬虔と対置される。

「暴動(*Obougos*)が繰り返し起こり始める」(223節)のは、総督クマヌスの時代(紀元後四八年―五二年頃)のことである(一二章)。神殿の護衛に当たっていたローマ兵士の口にするのはばかられる冒瀆的行為に、「群衆全体が憤り」、ローマ軍との衝突の混乱の中で、実に「三万人以上」が死亡する。「この不幸な出来事に続いて、盗賊による他の暴動が起こった」(228節)のも当然であり、その責任は挙げて総督にある、と言わんばかりである。その盗賊退治の際に、再びローマ兵士による冒瀆的

行為が重ねられ、ユダヤ民族は「敬神の念」により一つに結集し、件の兵士の処刑を以てようやく騒ぎを静めることができたのである。続く、「ガリラヤ人とサマリヤ人との衝突」事件の際の、クマヌスによる不適切な処置が、暴動を誘発し、穏健なユダヤ人指導者たちの必死の努力にもかかわらず、「多くの者たちが、無謀にも盗賊の仲間となり、全国土に略奪が横行し、大胆不敵な連中が蜂起をくり返した」(238節)。このような経緯について、クマヌスの責任をシリア総督に訴えるユダヤ人貴族らの言葉は、ヨセフスの気持ちを表わすものである。結局事件はクラウディウス帝の前に運ばれ、帝の裁決により、クマヌスは追放刑に、彼の右腕とも言うべき軍団副官はユダヤ人のリンチに委ねられる。クマヌスの罪は皇帝御自身によって、公式に認められたのである。

ところで、この皇帝クラウディウスは、「妻アグリッピナの陰謀に欺かれて」(249節)、ネロを後継者として残して、死ぬ(ヨセフスは、アグリッピナによるクラウディウス暗殺にはふれない)。この「陰謀」のユダヤに与えた影響は大きい。即ち、この陰謀の結果帝位についたネロの「精神錯乱」「狂乱」「運命に対する傲慢な態度」

(ガイウス・カリグラに対して用いられたのと同じ言葉)「残虐」は、「既に人口に膾炙していることなので」いまさらふれるまでもないほどであり(250—251節)、その治政にユダヤの情勢が一層緊迫の度を加え、結局彼の治政下に「第一次ユダヤ戦争」が勃発するのである。一見さげない「アグリッピナの陰謀」への言及も、ローマの病根の深さを示すものとして、前後の文脈の中に位置づけられているのである。

さて、ネロ帝治下の最初のユダヤ総督フェリクス(既に前帝時代から総督であった)は、ユダヤ人叛徒の鎮圧・処刑に熱心であったが、抑えても抑えても、燃え上がる炎を消すことはできなかった(一三章)。ヨセフスは、「戦」においてはフェリクスの統治を描く際に、彼に対して非難の言葉を浴びせてはいない。ヨセフスは、一三章では、ローマ側の失政としては、冒頭においてネロの「悪政」(この点後述参照)に触れるにとどめ、「盗賊団」「シカリ派」「偽預言者たち」「魔法使い」といった「ユダヤ人叛徒たち」の描写に重点を置くという方針を立てたのかもしれない。但し、少しでも反乱の疑いのあるものは力づくで押し潰す(例えば260節)フェリクスの強圧

的弾圧的な統治政策は、少なくとも「緊張緩和」とは程遠いものであったことは、ヨセフスの読者の容易に気付くところであろう。すぐ次の総督フェストゥスの統治は、たった一節(271節)で済まされるが、それによれば、彼の統治政策も前任者と同じく、弾圧を専らとするものであった。フェリクスの場合もフェストゥスの場合も、表面上は、「悪者を退治して立派に統治した」と読み得るような文章が用いられているが、彼らの弾圧政策はユダヤの混乱を一層深め、国民の反ローマ感情をますます煽り立てたと考えるのが自然であり、ヨセフス自身も読者にそのことを伝えたかのように思われるのである。しかし、我々の論点はこの点についての読み込みの当否に依存しない。

#### 四

272節に至って、ヨセフスの筆は、突然激しい熱気を帯びて総督たちの糾弾へと向けられる。これまでのように、「統治の不手際」や「失政」をほのめかすのではなく、正面からあからさまに非難攻撃し始めるのである。「第一次ユダヤ戦争」勃発に至る、緊張と混乱の高まりを説

明するには、「悪代官」の登場が不可欠であると考へたのかも知れない。それはともかくとして、フェストゥスの次の総督アルビヌス「が手を染めなかったような悪行はなく」、「賄賂」をアルビヌスに払いさえすれば何はばかることもないといったその統治下に、「革命」(revolutions) も「内乱」(civilis) も野放しとなり、ユダヤの平和は失われ、「その頃以来、来るべき(エルサレム) 陥落の種が町に播かれ始めたのである」(277節)。ヨセフスは、このような大混乱の責任を挙げて総督に帰すのである<sup>(5)</sup>。

最後のユダヤ総督ゲッシウス・フロルスは、アルビヌスも顔負けの極悪人として紹介される(277—279節)。実際彼は、「(ユダヤ) 民族に対して戦争を企てて」おり、ユダヤ民族に対して「日々災いを増し加えて」「反乱へとかりたて」たのである(283節)。戦争勃発の直接的な引き金となったカイサレイアのギリシア系住民とユダヤ人住民との争いに際しても、ゲッシウス・フロルスは、ユダヤ人住民からの買収工作に応じておきながら、約束を履行せず、「紛争が勝手に起こるのを放置し」(289節)、剩え、カイサレイアから別の町へ避難したユダヤ人たち

を逮捕する。彼は、「燃え上がり始めていた戦いの火を消すべきであり、混乱の原因を取り除くべきであったにもかかわらず」(296節) 逆の行為に励み(彼も又、神殿財産に手をつける)、「平和」を求めるユダヤ人有力者たちの、道理に適った穏やかな請願の言葉(301—304節)に激怒し、兵士たちに無差別殺戮を命じ、「穏やかな市民たちも数多く」鞭打たれ磔刑に処せられた。とりわけヨセフスが糾弾してやまないのは、「騎士階級の人々を鞭打ち、磔刑に処した」ことであり、これは「以前には誰もあえてしようとしなかったこと」であった(305—308節)<sup>(6)</sup>。

なお、右に触れたカイサレイアの紛争について、ヨセフスは、「カイサレイアのギリシア人たちもネロから町の支配権をかち取ると、この決定を記した文書を持ち帰り、ここに戦争が勃発することとなった」(284節)と記し、「第一次ユダヤ戦争」勃発の責任を、或は、少なくとも「ギリシア人」を力づけて285節以下に述べるような理不尽な行為に対しては「責みを与えたことの責任を、ネロの不適切な裁定に帰している。その理不尽な行為(ユダヤ人に対するいやがらせ)は、「この戦争から生じた災いのひとさみにあうような正当な口実によるもので

はなかつた」(285節)。つまり、「第一次ユダヤ戦争」の導火線となったカイサレイアの紛争の責任は、ヨセフスによれば、ネロ及びフロルスの不適切な処置と、「ギリシア人」の理不尽な行為とにあるのであって、ユダヤ人は百パーセント被害者なのである。

このような大混乱の中にあつても、ユダヤ人有力者たちは情勢の鎮静化への道を諦めず、「群衆」も彼らの説得にすなおに従うが、「混乱が鎮まるとフロルスは苛々し始め、又もや混乱を燃え上がらせようと画策」し(318節)、無理難題をふっかけ、再び大祭司らの説得工作により鎮静化した「叛徒たち」に、理不尽にも兵士らを襲いかからせたが、ここに及んで「市民たち」(叛徒ではない!)が一致団結してこれに抵抗し対決したため、逆にフロルスの方が形勢不利となり、すぐすとカイサレイアへ逃げ帰った(332節)。しかし、フロルスはこれに懲りることなく、「さらに新たな戦争の企てを心に抱き」、シリア州総督ケステイウスへの報告の中で「今回の戦闘の発端をユダヤ人の責任に帰し、被害者であるユダヤ人を加害者に仕立て上げた」(333節)。これに対して、ユダヤ人の反応は、相変わらず極めて穏やかで、理に適

つたものである。即ち、「平和を熱望する」ユダヤ人指導者たちの訴えを聞いて、アグリッパ二世も「フロルスの残虐な行為に憤りを覚え」(337節)、エルサレムの一般市民たちも、王とシリア州軍団副官を中心とする視察団を丁重に「歓迎」し、被害状況を示して、自分たちは「他の総てのローマ人には服従している」が、「ただフロルスだけをそのユダヤ人に対する程度を超えた残虐性の故に憎んでいるのだ」と訴え、軍団副官も「彼らの従順さを充分理解」し、聖域に「群衆」を集め、(何の混乱も起こらない!)、ローマ人に対する彼らの「信頼」(乃至忠誠)(*fidelitas*)を褒めそやし、「平和を維持するよう」勧め勵まして、何の抵抗も妨害もなく神殿礼拝すらさせて、無事帰国する。さらに、「市民たち」はアグリッパ二世の「演説」に続く指示に従順に従って、ローマとの関係の修復に努力する。<sup>(8)</sup>

## 五

この時期になって、ようやく、王の指示に従順に従わない「叛徒たち」の動きが、開戦に直接つながる形で紹介される。(「アグリッパ二世の演説」が一つの時期を画



する役割を担わされている可能性が高い。註(7)参照)。406節以下の彼らの導入は余りにも唐突であり、突然の状況の変化はヨセフスの記述を表面的に読む限りでは全く説明不可能である。こうして「ユダヤ戦争」は、一七章に至って、新たな段階に入り、「一般市民」とはつきり区別される「叛徒たち」が我がもの顔に跋扈し始める(408—410、417節)。しかし、この段階においても、なおローマ側の責任追及の調子は弱められることなく、ただ叛徒に対する非難の高まりによって相対的に弱められているに過ぎない。エルサレムを中心とする反乱鎮圧を請願するユダヤ人使節団の到来は、「戦争を煽り立てたか」と思っていた「フロルスにとってはすばらしい福音であった」(420節)。再び「叛徒たち」対「平和を愛する市民たちとローマ軍」の戦いが続き(422—456節)、叛徒たちのけがれた行為の故に、「開戦の原因はもはや取り返し難いものとなった」と思われた程であった(455節)。

パレスチナ各地の諸都市における、ユダヤ人住民と非ユダヤ人住民との争いも日に日に激しさを増し加え——この過程で、フロルスが非難され(457節)、アグリッパ二世の重臣ウァルスの「食欲」に動かされた「不法な蛮

行」も「王国を破滅へと追いやる」(481—483節)——遂に、シリア州総督ケステイウス・ガッルスの出陣によってローマ軍の本格的介入へと事態は進む。常識的にはこれユダヤ人の反乱騒動に決着が付けられるはずであった。ところが、あろうことか、エルサレム陥落を目前にして、ケステイウス・ガッルスは、「フロルスに買収された」[「一陣営指令官及び騎兵隊長の大部分」]の働き掛けにより、城内突入の好機を逸するのである。この時に突入していれば「彼は難なく町を手中に収め、戦争も終結していた」はずであり、「まさにこのことがもととなって、戦争はこれほど長期間に引き延ばされ、ユダヤ人は癒しがたい災いに満たされ」たのである(531—532節)。さらに、ローマ軍を密に城内へ招じ入れようとした指導者たちの計画は、「ケステイウス・ガッルスがぐずぐずしているうちに」叛徒に察知されて失敗し、それでもローマ軍が善戦して叛徒たちが恐慌状態に陥り、この好機を狙って「市民たち」が再度ローマ軍に対して城門を開こうとしていたそのときに、ケステイウス・ガッルスは、「突然」「不可解にも」「撤退し始め」(540節)、息をふきかえして追撃を開始した叛徒たちによって、壊滅的な打

撃を受けるのである。「彼はもうしばらくがんばって包圍攻撃を続けてさえいれば、じきに町を手中に収めていたことであろう」(539節)。このように、ヨセフスによる、ケステイウス・ガッルス<sup>(9)</sup>の遠征失敗の記事の中には、開戦の決定的な責任をローマ側に負わせようという彼の意図が、はっきりと認められるのである。

六

以上の検討により、『ユダヤ戦記』第二巻の一章——九章においてヨセフスが読者に何を訴えようとしているのか、少なくともその一部を明かにすることができた。彼は、「ユダヤ人がローマ人との不幸な戦争に巻き込まれたのは、「ユダヤ人叛徒」の不穏な動きもさることながら、それとは比較にならない程に「ローマ人」の側に重大な問題があったため」であり、「不穏な動きを全面的な反乱にまで育て上げた責任はローマ人の側にある」と強く主張しているのである。「この反乱(第一次ユダヤ戦争)が起きた時は、ローマの国内事情が悪化していた(病んでいた)(*ἢ Πολυτῶν ἐνοχῶν τῶν οἰκῆν*)時期に当たっていた」(4節)という『戦』の序文のもう一

つの言葉は、以上において我々が確認した事柄をも指すのであろう。即ち、ヨセフスは序文において、『戦』の本文の内容を正確に「暗示」していたと考えられるのである。このような著述の意図と構成を正しく認識して初めて、歴史資料としての『ユダヤ戦記』の正当な評価が可能となるのである。<sup>(10)</sup>

(1) 長窪専三「いわゆる規範的ユダヤ教について」『聖書と教会』一九八一年一〇月号、五頁。

(2) Sh. J. D. Cohen, *Josephus in Galilee and Rome* (Leiden: Brill, 1979), pp. 97, 234 ff. esp. 236 f.

(3) ヨセフスは「戦記」全体を「よいローマ人」と「悪いユダヤ人」の戦いとして描いている。本稿の結論を先取りすれば、『戦』第二巻の最初から一九章あたりまでにおいて、主として「悪いローマ人」の責任が追及される。この後の、同二〇章あたりから第三巻八章(ヨセフスのローマ軍への投降を描いた箇所)あたりまでは、ヨセフスを主役とする中間部分である。それ以降は、「悪いユダヤ人」の跋扈する時代である。そして、あたかも『戦』を貫く主要主題をもう一度繰り返すかのごとくに、「悪いローマ人」が「悪いユダヤ人」と結託してローマ帝国の平和と安寧を脅かし、ヨセフスを含む「よいユダヤ人」の失脚を企てるが、ウェスパシアヌスとティトゥス(よいローマ人)の賢

明な処置により、悪しき陰謀は露見し、首謀者（ローマ人とユダヤ人）は惨めな最期をとげる、というエピソードが、『戦』の一番最後に置かれている。——「善」が勝利し、「悪」は滅びる！——。『戦』全体を貫くこの大きな構造については、稿を改めて論ずる予定である。

(4) ヨセフスは『戦』に並行する『ユダヤ古代誌』において(XX162以下)、フェリクスを「不義を行なうことを欲する者たち」(*of dikaiosin beloures*)の一人と呼び、「盗賊」(『戦』のシカリ派に対応)を使って大祭司を暗殺させ、これが「盗賊」の凶行の蔓延に与って力があつたと、最大級の非難を浴びせ、さらに、同XX182ではフェリクスが「ユダヤ人に対してなした悪業の数々」に言及する。ヨセフスは、『戦』におけるフェリクスの記事が、手ぬるいことに気付いて、『ユダヤ古代誌』においてそれを補正したのであるうか。

(5) 『ユダヤ古代誌』XX204では、ヨセフスは「アルピヌスはエルサレムに到着すると、多数のシカリ派を滅ぼし、国士を平和にするためにあらゆる努力と熱意を傾けた」と記している。『戦』の記述と真っ向から対立するこの記述は、「平和云々」という部分を除いて、基本的には『戦』II21のフェストゥスの統治の報告と一致している。要するに、ヨセフスは、「盗賊を退治した」のがアルピヌスにせよフェストゥスにせよ、代々の総督たちの下でユダヤの緊張が次第に高まっていたことを、読者に印象付けようとして

いるのであろう。

(6) 騎士階級に限らず、ローマ市民は原則として磔刑から免れていた。キケロ『ウエッレス』五・六二(一六二以下)、六六(一七〇)、スエトニウス「ガルバ伝」九・二、ヘンゲル『十字架』(土岐正策・健治訳、ヨルダン社、一九八二年)五四頁以下、参照。

(7) ヨセフスにおける「指導的ユダヤ人」「一般市民」「叛徒」の区別についての立ち入った検討は、別稿に委ねねばならない。その区別は、屢々言われる程に単純ではなく、『戦』全体を通じて必ずしも一様ではない。ヨセフスはいずれ相互の関係を幾つかの「時期」に分けて考えているようである。この点後述参照。

(8) アグリッパ二世の「指示」に先だって、王の長い演説が置かれているが(345—410節)、叛徒たちに戦争をやめよう訴えたこの演説は、以上に示したような状況の中では、完全に宙に浮いている。もとよりヨセフス自身の立場と見解を表明しているこの演説は、しかしながら、その直前の歴史記述の内容とは逆に、ユダヤの状況が緊迫し、叛徒たち、民族的伝統に背く気遣いじみた行動が、今にも祖国を滅ぼそうとしているような印象を、読む者に与える。このような「演説」と歴史記述とを組み合わせて、それぞれに異なる役割(機能)を担わせるのも、ヨセフスの文学的手法の一つであろう。

(9) 諸都市における争乱は、もとより我々の主題と無縁で

はあり得ないが、紙数の制限により本稿では検討を省かざるを得ない。

(10) ヨセフスが、『戦』全体としては、ユダヤ人とローマ人双方の戦争責任を追及しつつ、「総ては神(運命)の意志による」との神学的解釈によって、最終的には双方の責任を解除しようとしていることについて、差し当たり、拙訳『ユダヤ戦記』II 539、註(28)(『ヨセフス全集』第2巻(日本キリスト教団出版局、一九八五年)所収)及びそこで指示されている箇所参照。さらに、ユダヤ人叛徒の罪

を贖うべく、「悔い改め」と「信仰に基づく英雄的行為」を導入していることについては、拙論「歴史家ヨセフスの誕生」(『聖書と教会』一九八一年、十月号、八一―一三頁)参照。

なお、筆者は、本稿の結論を補強し得る、『戦』の語彙の用法の分析を既に終えており、近い将来別稿として公表する予定である。

(一橋大学助教授)